

黒い人と赤いそり

小川未明

はるか、北の方の国にあった、不思議な話であります。

ある日のこと、その国の男の人たちが氷の上で、なにか忙しそくに働いていました。冬になると、海の上までが一面に氷で張りつめられてしまうのでした。だから、どんなに寒いかということも想像されるであります。

夜になると、地球の北のはてであったから、空までが、頭の上に近く迫って見えて、星の輝きまでが、ほかのところから見るとよりは、ずっと光も強く、大きく見えるのであります。その星の光が寒い晩には凍って、青い空の下に、幾筋かの細い銀の棒のように、にじんできているのが見られたのです。木立は音をたてて凍て割れますし、海の水は、いつのまにか、動かなくなるとぎすました鉄のように凍ってしまったのであります。

そんなに、寒い国でありましたから、みんなは、黒い獣の毛皮を着て、働いていました。ちょうど、そのとき、海の上は曇って、あちらは灰色にどんよりとしていました。

すると、たちまち足もとの厚い氷が二つに割れました。こんなことは、めったにあるものでありません。みんなは、たまげた顔つきをして、足もとを見つめていますと、その割れ目は、ますます深く、暗く、見るまに口が大きくなりました。

「あれ！」と、沖の方に残されていた、三人のものは声をあげましたが、もはやおよびもつかなくなつたのです。その割れ目は、飛び越すことも、また、橋を渡すこともできないほど隔たりができて、しかも急流に押し流されるように、沖の方へだんだんと走っていつてしまったのであります。

三人は、手を挙げて、声をかぎりに叫んで、救いを求めました。陸の方に近い氷の上に立っているおおぜいの人々は、ただ、それを見送るばかりで、どうすることもできませんでした。

たがいにわけのわからぬことをいって、まごまごしているばかりです。そのうちに、三人を乗せた氷は、灰色にかすんだ沖の方へ、ぐんぐんと流されていつてしまいました。みんなは、ぼんやりと沖の方を向いているばかりで、どうすることもできません。そのうちに、三人の姿は、ついに見えなくなつてしまいました。

あとで、みんな大騒ぎをしました。氷がとつぜん二つに割れて、しかもそれが、箭を射るように沖の方へ流れていつてしまうことは、めったにあるものでない。こんな不思議なことは、見たことがない。それにしても、あの氷といっしょに流されてどこへかいつてしまった三人を、どうしたらいいものだろうと話し合いました。

「いまさうしようもない。この冬の海に船を出されるものでなし、後を追うこともできないではないか」と、あるものは、絶望しながらいいました。

みんなは、うなずきました。

「ほんとうにしかたがないことだ」といいました。しかし、五人のものだけが頭を振りました。

「このまま仲間を、見殺しにすることができないものでない。どんなことをしても、救わなければなら

ない」と、それらの人々はいいました。

すると、おおぜいの中の、あるものは、

「今度のことは、この国があつてから、はじめてのことだ。人間業では、どうすることもできないことだ」といったものがあります。

なるほど、そのものがいうとおりだと思つたのでしよう。みんなは、黙つて聞いていました。

「みんながゆかなければ、俺たち五人のものが助けにゆく」と、五人は叫びました。

ちようど、この国には、赤いそりが五つありました。このそりは、なにかことの起こつたときに、犬にひかせて、氷の上を走らせるのでした。

夜の中に、五人のものは、用意にとりかかりました。食べるものや、着るものや、その他入り用のものをそりの中に積み込みました。そして、夜の明けるのを待っていました。その夜は、いつにない寒い夜でしたが、夜が明けはなれると、いつのまにか、海の上には昨日のように、一面氷が張りつめて光っていたのです。

五人のものは、それぞれ赤いそりに乗りました。そして、二、三匹ずつの犬が、一つのそりをひくのでした。

昨日行方不明になつた、三人のものの家族や、たくさんの群衆が、五つの赤いそりが、搜索に出かけるのを見送りました。

「うまく探してきてくれ」と、見送る人々がいました。

「北のはしの、はしまで探してくる」と、五人の男たちは叫びました。

いよいよ別れを告げて、五つの赤いそりは、氷の上を走り出しました。沖の方を見やると、灰色にかすんでいました。ちようど、昨日と同じような景色であつたのです。みんなのものの胸の中には、い知れぬ不安がありました。そのうちに、赤いそりは、だんだん沖の方へ小さく、小さくなって、しまいには、赤い点のようになって、いつしか、それすらまったくかすんでしまつて、見えなくなつたのであります。

「どうか無事に帰ってきてくれればいいが」と、みんなは、口々にいいました。そして、ちりぢりばらばらに、めいめいの家へ帰つてしまいました。

その日の昼過ぎから、沖の方は暴れて、ひじょうな吹雪になりました。夜になると、ますます風が募つて、沖の方にあたつて怪しい海鳴りの音などが聞こえたのであります。

その明くる日も、また、ひどい吹雪でありました。五つの赤いそりが出発してから、三日めに、やつと空は、からりと明るく晴れました。

三人の行方や、それを救いに出た、五つの赤いそりの消息を気づかつて、人々は、みんな海辺に集まりました。もとより海の上は、鏡のように凍つて、珍しく出た日の光を受けて輝いています。

「ひどい暴れでしたな」

「それにつけて、あの三人と、五つのそりの人たちは、どうなりましたことでしょうか、しんばいになりません」

群衆は、口々にそんなことをいいました。

「五日分の食物を用意していったそうです」

「そうすれば、あと二日しかないはずだ」

「それまでに帰ってくるでしょうか」

「なんともいえませんが、神に祈って待たなければなりません」

みんなは、気づかわしげに、沖の方を見ながら聞いていました。

沖の方は、ただ、ぼんやりと氷の上が光っているほか、なんの影も見えなかったのです。

とうとう、赤いそりが出てから、五日めになりました。みんなは、今日こそ帰ってくるだろうと、沖の方をながめていました。

その日も、やがて暮れましたけれど、ついに、赤いそりの姿は見えませんでした。

六日めにも、みんなは、海岸に立って、沖の方をながめていました。

「今日は、もどってくるだろう？」

「今日帰ってこないと、五つのもそりにも変わりがあったのだぞ」

みんなは、口々に聞いていました。

しかし、六日めにも帰ってきませんでした。そして、七日めも、八日めも……ついに帰ってきませんでした。

「捜しにいった方がいいものだろうか、どうしたらいいものだろうか……」

みんなは、顔を見合っていました。

「だが、こんどは捜しに行くか」と、あるものはいいました。

みんなは、たがいに顔を見合いました。けれど、一人として、自分がいくという勇気のあるものはありませんでした。

「くじを引いて決めることにしようか」と、ある男はいいました。

「俺は、怖ろしくていやだ」

「俺も、いくのはいやだ」

「……………」

みんなは、後退りをしました。それでついに、救いに出かけるものはありませんでした。みんなは、口々にこういいました。

「これは災難というものだ。人間業では、どうすることもできないことだ」
彼らは、そう言って、あきらめていたのであります。

それから、幾年もたってからです。

ある日のこと、猟師たちが、幾そうかの小舟に乗って沖へ出ていました。真っ青な北海の水色は、ちやうど藍を流したように、冷たくて、美しかったのであります。

磯辺には、岩にぶつかって波がみごとに砕けては、水銀の珠を飛ばすように、散っていました。

猟師たちは唄をうたいながら、艀をこいだり、網を投げたりしていますと、急に雲が日の面をさえぎったように、太陽の光をかげらしました。

みんなは不思議に思って、顔を上げて、空を見上げようとしますと、真っ青な海のおもてに、三つ

の黒い人間の影が、ぼんやりと浮かんでいるのが見えたのです。その三つの黒い人間の影には足がありませんでした。

足のあるところは、青い青い海の、うねりうねる波の上になっていて、ただ黒坊主くろぼうずのように、三つの影が、ぼんやりと空間に浮かんで見えたのであります。

これを見た、みんなのからだは、急にぞっとして身の毛がよだちました。

「いつか行方のわからなくなった、三人の亡霊ぼうれいであろう」と、みんなは、心でべつべつに思いました。「今日は、いやなものを見た。さあ、まちがいのないうちに陸へ帰ろう」と、みんなはいいました。そして、陸に向かつて、急いで舟を返しました。

しかし、不思議なことに、まだ陸に向かつて、幾らも舟を返さないうちに、どの舟も、なんの故障がないのに、しぜんと海にのみ込まれるように、音もなく沈しずんでしまいました。

つぎの話は、寒い冬の日のことです。海の上は、あいかわらず、銀のように凍っていました。そして、見わたすかぎり、なんの物影も目に止まるものとはありませんでした。

よく晴れた、寒い日のことで、太陽は、赤く地平線に沈みかかっていました。

このときたちまち、その遠い、寂寥せきりょうの地平線にあたって、五つの赤いそりが、同じほどにたがいに隔てを置いて行儀ただしく、しかも速すみやかに、真一文字にかなたを走っていく姿を見ました。

すると、それを見た人々は、だれでも声を上げて驚おどろかぬものはなかったのです。

「あれは、いつか、三人を捜索に出た、五人の乗っていった赤いそりじゃないか」と、それを見た人々はいったのです。

「ああ、この国に、なにか悪いことがなければいいが」と、みんなはいいました。

「あるとき、あの五人のものを救いに、だれもいかなかったじゃないか」

「そして、あの後、なにもお祭りひとつしなかったじゃないか」

みんなは、行方のわからなくなった、仲間に対して、つくさなかったことが悪いと、はじめて後悔こうかいしました。

この国にきたひとは、黒い人と赤いそりのはなしを、不思議な事実として、だれでも聞かされるであります。